



Humanity & Nature Newsletter

No.47

March 2014

地球研ニュース



ナミビア北部の乾季、痛いぐらいの日射が照りつけるなか、水環境調査のさいに会ったオワンボ族の子。2012年～2013年の雨季は、50年に一度あるか無いかの大干ばつだった。「そんなのへっちゃらさ」と言わんばかりの愛くるしい笑顔で、家の柵の前で出迎えてくれた(2013年9月、撮影: 檜山哲哉)

今号の 内容

P2

特集1 ● 広報と成果発信のあり方を語る
地球環境学の魅力を発信し、
地球研「コミュニティ」の拡大をねらう
阿部健一 + 田中 樹 +
寺田匡宏 + 熊澤輝一

P5

特集1 ● 広報と成果発信のあり方を綴る
ストーリーとストレージ
デザインの世界に学ぶ「刷新」の手法
林 憲吾

「データ」発信の功罪
影響力を活かしたプラットフォームづくりを見学する
内山愉太

当事者であることを確認しあう場づくり
菊地直樹

言葉だ、言葉、言葉
鞍田 崇

P9

■ 百聞一見——フィールドからの体験レポート
マングローブ林を利用する若者たちとの
コラボレーション
竹村紫苑

P10

■ 教育活動の報告
文理の枠にとらわれない自由な探求心を育む
京都府立洛北高等学校
「スーパーサイエンスハイスクール」への協力
寺田匡宏

P11

■ 地球研レクチャーシリーズの報告
「闇夜を歩く猫」と対話する
サンデル教授の連続レクチャーを受講して
ナイルズ・ダニエル = イライ

P12

■ 前略 地球研殿——いま、こんなことをしています
「アーカイブ」に導かれながら渡る、
仏教と環境と経済のスクランブル交差点
辻村優英

P13

■ 所員紹介——私の考える地球環境問題と未来
部署の垣根を超え、研究者との協働に邁進する
本田孝之

P14

■ お知らせ

地球環境学の魅力を発信し、地球研「コミュニティ」の拡大をねらう

出席●阿部健一(地球研教授)+田中 樹(地球研准教授)+寺田匡宏(地球研特任准教授)+熊澤輝一(地球研助教)

『地球研ニュース Humanity & Nature』は、2006年4月に第1号が発刊された。当初は制作を外部委託しており、美しく豪華であった反面、「自分たちのニュースレター」という意識を共有しにくい性格もあった。そこで、編集作業を内部で行なうように体制を刷新してみた。自分たちで、だれを対象として、なにを伝えるべきか、考えるようにした。それから6年。地球研の広報活動が多様に展開しはじめ、それぞれの出版物の性格づけが明確になり、期待される役割も、地球研が外部に発信すべき情報も見直すべき時期がきたのではないかと。二度目の「刷新」について語ってみた

阿部●私が地球研で広報部門を担当するようになって刷新したニュースレターですが、それからすでに6年がたちました。われわれ内部スタッフの対談・座談を多用して議論する誌面づくり、発信する情報にこめた思いは、ニュースレターとして画期的だと注目されていた時期もあった。とはいえ、やはりマンネリになっているのではないかとという自省があります。

まずは、現状の課題を聞きましょうか。

読者対象を再考する

田中●現行のニュースレターは、すこし「内向き」という印象があります。地球研に関係ある人びとと交流することは重要ですが、コミュニケーションツールとして、情報を発信する方向をもうすこし外に向けてもよいのではないかと。だれに向けてのニュースレターなのか、いま一度確認してみてもどうでしょうか。

阿部●問題はそこです。出発点では広い意味での「地球研コミュニティ」を読者対象としているが、そろそろそこから飛び出して発信してもよい時期ですね。

熊澤●私は、このニュースレターを読んで、「地球研に来たい」、「地球研で研究者として働きたい」と思ってもらえるようなメディアであればと考えています。

田中●それに加えて、「裾野人材」といいま

すか、もっと広く厚く訴えるようなものでもよいと思う。

寺田●私が課題だと考えているのは、さまざまな研究はしていても、地球環境学の形成に向けての議論がないこと。すでに第II期にあつて、一段落したあとだからかもしれませんが、それがニュースレターの方向を変えるべきだと思う理由です。

忘れてはいけないのは写真の役割です。

所内で地球研写真コンテストを開催して、ニュースレターの表紙を飾っている。これ自体が財産であり、こういう創意を表に出せる柔軟な組織を表していると思います。

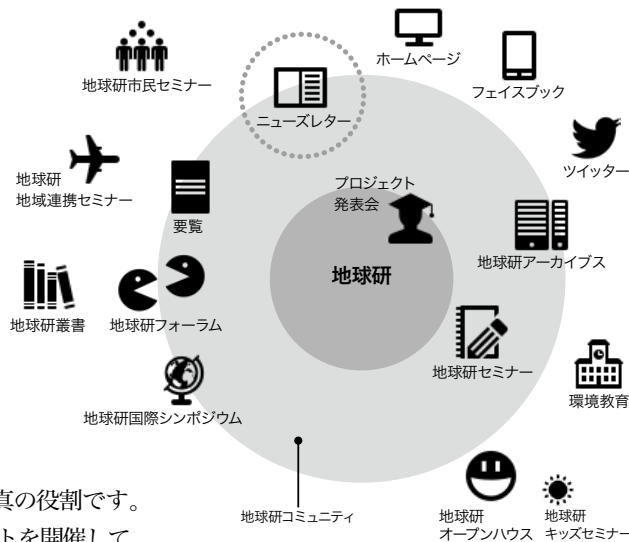
一般社会に向けて発信する意識を

田中●地球環境学を構築することについては、どう向かうかが重要です。地球研では、抽象性の高い議論は多いが、もっと即物的に「ああして、こうして」という道筋を考えることがあってもいい。地球環境学に限らず学問がつくれるのは、それに関心を持ち取り組む人びとがどれだけ多くいるかにかかっています。それがその学問の多様性を増すことにもなるでしょう。

阿部●ニュースレターを読みたくなるような人を増やすということですね。

田中●寺田さんは高校生向けの活動をしていますね。高校生のポテンシャルは高いと思います。ニュースレターを配る対象として高校生に注目してもいいでしょう。それは、一般社会に向けて発信することにもつながります。

阿部●現在の配布対象は基本的に研究者にかぎられています。そこをどこまで広げるのか。つまり、研究者以外の人か読んでも「なるほど」と思える内容にするのか。



地球研のさまざまな成果発信

熊澤●マンガやイラスト、図面を入れて読みやすくできたらと思いますね。

寺田●学界向けのジャーナルの側面や地球環境学から社会へのオピニオンを書ける性格もほしい。しかし、それでは一般社会向けのものとは両立しにくい。高校生向けなら、ガラッと変えざるをえない。

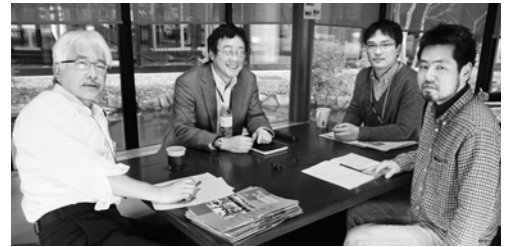
田中●あるいは、コンテンツを増やす。

阿部●ニュースレターだけの情報発信を考えるのは適切でないかもしれません。ウェブやほかの媒体も視野に入れたうえで、2か月に1回刊行する紙媒体としての内容とターゲットを議論しなければいけない。

田中●地球環境学の構築のために、学界にアピールするという考え方もあります。しかし、あるていど完成された人にアピールしても効果があるのか疑問です。それが、高校生や大学生であれば、数年後には何人かが地球研にくるかもしれません。学問の構築には、5年先や10年先を見据えた人材育成の「しかけ」が必要です。

フィールドは伝えたいエピソードの宝庫

阿部●自分の着想やアイデア、未完成けれども創造的な考え方を、論文や本の一章



右から
てらた・まさひろ
専門は歴史学、記憶表現論、研究
高度化支援センター特任准教授
二〇一二年から地球研に在籍。
くまざわ・てるかす
専門は環境計画論、研究高度化
支援センター助教。二〇一一年
から地球研に在籍。
たなか・こさる
専門は境界農学。研究プロジェ
クト「砂漠化をめぐる風と人と土
プロジェクトリーダー」。二〇一
一年から地球研に在籍。
あべ・けんいち
専門は環境人類学、相関地域研
究。研究高度化支援センターコ
ミュニケーション部門長、教授。
二〇〇八年から地球研に在籍。

などとは違うかたちで気楽に表現できる
場はほしい。しかも、そのような議論に多
くの人を巻き込むしかけが必要です。

田中●プロセスを内包する場ですね。

阿部●見るだけでなく、参加してもら
いたい。そうすると、いまのニューズレター
という形式がよいのかどうか。

田中●時間と労力をかけてニューズレター
の原稿を書いている研究員もいます。なか
には、「ニューズレター」という範疇を超え
た内容の記事もあります。

阿部●若い人の文章に感心することはある。

田中●そのような記事には、ニューズレ
ターという媒体はすこし軽い。研究員が業
績リストに書き加えることができるよう
な媒体があるとよいが……。

阿部●学術雑誌という線ですか。

田中●そうですね。とはいえ、「プロジェク
トとしてこんなことをしています」という
単純な紹介も社会は求めています。学術雑
誌の「学術」に力を込めずに、地球研がなに
をしているのかを赤裸々にみせてもよい
のではないですか。

阿部●フィールド調査で耳にしたおじいさ
んの一言がとても重かったりするしね。

田中●そういう記事の数を増やしません
か。フィールドには論文にはならないけれ
ども「ぜひ伝えたい」という素材がたくさん
ある。出張から戻ったら言いふらしたくな
るのですが、発表する場がなかなかなくて、
そのうち忘れてしまう。(笑)

熊澤●そうすると学術雑誌ではなくなる。

田中●学術雑誌の「雑」部分を強調する。

熊澤●『地球研ニュース』は、学術誌と『月刊
ソトコト』とのあいだのテイストのイメ
ジでした。このメンバーだから、こういつ
たテイストになっているのだと思う。これ
は、ニューズレターの文化として継承して
ほしい。そういうニューズレターの「味」を
守れる人に携わってもらえたらと思います。

阿部●それは継承しましょう。こういう楽
しい仕事にどうにかたちで仲間をもつ
と引き込むか。書き手としても、よい読み

手、つまり編集委員というかたちでもよい。

いつぼう、企画をもち込むことについて
は、どうしたらよいでしょう。

田中●地球環境学という、これまでは地
球環境「問題」を扱う——イシューではな
くプロブレムを扱うという意識でした。出
発点がネガティブ。むしろ、「こうするとお
もしろい」、「こうすればなにかできるの
ではないか」というものを拾いあげる作業や
役割を、この媒体に与えたいですね。

阿部●それこそが、私たちが標榜している
「未来可能性」ですね。

田中●地球環境問題の解決には、「問題発掘・
解決型」の取り組みだけではなく、なにか
を活かすことで問題を相殺するという方
法もあると思います。

書くことで研究成果を 社会に還元する

阿部●継承するのは重要ですが、ここは研
究所としての文化や歴史をつくりにくい
研究所です。人が入れ替わるうえ、スタッ
フの帰属意識は研究所ではなくプロジェ
クトにある。そういう構造のもとで、地球
研で学ぶ意義、地球研で得たことを多くの
人に伝えるには、もっと工夫が必要です。

熊澤●世界各地の人間と自然とのかわり
を探り出して、そのしゅみを伝えることは
できている。しかし、それを人の暮らしの
なかでどう実践的に活かせるかという知
識提供はしていない。田中さんの言葉を借
りると、「理論を具体化するコツ」ですね。
われわれが学んだことや海外で見えた
ことを一般の人に還元できるものが書け
たら、多くの方に読んでもらえると思う。

阿部●「こんなにおもしろいことがある」と
いうポジティブな問題探しは、地球研では
あまりしていないですね。

寺田●従来は、このニューズレターの座談
会が中心でした。それを話し言葉ではなく
すこし長めの記事で伝えるのも地球環境
学の魅力の発信には悪くないでしょうね。

阿部●これまではコミュニケーションを重

視して、対談や座談会で検証することが中
心でした。自分の考えをあきらかにして、
周りの意見を求める面は弱かった。そうす
ると、「隼より始めよ」で、編集委員が自分
のコラムをもつつもりでまず書きはじめる。
それを読んで「自分も書きたい」という
人が現れるようだとおもしろい。

地球研のめざす環境教育の一環に

阿部●とにかく、現状の課題は、外部の人
に一方通行の情報発信に終わっているこ
と。もちろんニューズレターだから、地球
研のニュースを不特定多数の人に知らせ
る役割が基本ですが、Co-design、Co-produce
的なことがもう少しできないのですか。

田中●地域とつなぐとしたら、地域連携セ
ミナーなどで広報して読者になってもら
う。登録制で市民の地球研サポーターのよ
うなものを増やすのはどうですか。そうす
れば、コメントがもつときますよ。

阿部●対象を拡げて、拡げた人たちから意
見をもらうしかけですね。

田中●昨年末、小学校で児童と父兄を対象
に講演をしました。低学年の児童には少々
難しい話になっても、100%理解できなく
ても耳を傾けてくれました。ニューズレ
ターも、すべての記事が理解されることを
前提としなくともよいかもしれない。

阿部●子どもを意識しながら、その親に伝
える。子どもにとっても、われわれからよ
りも、環境問題を真剣に考えているお父さ
ん、お母さんの姿をみるほうが効果的で、
これこそが地球研のめざす環境教育です。

熊澤●「教育」と「コミュニティを拡げる」と
いうのは、じつは同じではないでしょうか。
地域連携セミナーなどの場でニューズレ
ターを配布して、地球研のファンを増やし
てコミュニティを拡げる。親が読んで、子
どもが読んで、こういう考え方をすると結
果的に「地球とつながった生活」を実践する
ことになる。こういう流れのなかにニュー
ズレターを位置づける。

田中●高校などの教育の現場は、研究所や

地球環境学の魅力を発信し、地球研「コミュニティ」の拡大をねらう

大学ではまじめに発掘してこなかった層ですね。教師を視野に入れてもいいかもしれない。どちらにしても、子どもや生徒を対象にするということは、将来の裾野人材を拡げるうえで重要です。

さまざまな媒体との相乗効果もほしい

寺田●ニュースレターを別のメディアが取りあげて、そこから広く普及するような回路、メディアとの相乗効果もほしいですね。

阿部●メディアは、書籍が前提ですか。

寺田●それ以外にも、インターネット・ラジオやホームページ、ビデオ配信などの複合する核としてのニュースレター。

阿部●このニュースレターの情報をもとに本に結実するものもあれば、どこかの放送局が番組してくれる。あるいは、詳しい情報はホームページで閲覧してもらうなど、ほかの媒体と連動させるのですね。

本に関しては、連載した記事を一冊の本にまとめるだけでもインパクトはある。

田中●モチベーションは上がるでしょうね。一般むけのエッセイも本というかたちになれば、書いた人の業績として残る。

寺田●それには一般受けする書き手が必要。

阿部●それがむずかしい。

寺田●編集をつうじた「統合」やアイデンティティの構築についてはどうですか。

熊澤●さきほど「超学際」の話題がでしたが、Co-design, Co-produceというのであれば、もっと舞台裏を見せてもよいと思う。

阿部●「経験の共有」もそう。自分の経験を誌面で披露することで次に活かす。

ニュースレターは「ニュースレター」なのか

阿部●最後に議論したいのは、ニュースレターという紙媒体以外の発信方法。ほかにも多様なメディアがあるが、それとの役割分担というか、相補関係。

田中●そのまえに、私はニュースレターという名前を変更してはどうかと思っています

ます。そのうえで、紙媒体の魅力をどう活かすかを考える。

阿部●ホームページむけに発信する情報と手にして読む人にむけた記事とを分ける必要はあるかもしれません。

熊澤●私は、カフェに置いてあって読みたくなるようなものにした

い。だから名前も変えて、書きたくなるような誌面にする。

阿部●名前を変えて、ある種のフリーペーパーにするのはどうか。無料で幅広い層に配布される。

熊澤●同位体環境学などの科学的にむずかしいことや未来設計などの概念的にわかりにくいことにはなかなかファンがつきにくい。それをどう発信するのか。

阿部●しかも、専門用語を一般の人がわかるようにどう書くのか。日高(敏隆)さんは、「それができないようでは、ほんものの研究者とはいえない」とまで言っていた。逆にいえば、専門用語でごまかさな姿勢。

伝えることは書き手の専門性を育む

田中●地球研の取り組みは、みなさんから税金からまかなわれています。専門外の人にもわかる言葉で発信する努力は、最低限しなければいけない。

熊澤●そうすると、前段の説明が増えて文字数が増える。ページ数も増えるから、このような出版物にはむかない。

阿部●「これではページ数がたりない。雑誌を出さなくては」とみんなが思うような内容にはしたい。記事を書いたのをきっかけに、本を書く人も出てくるかもしれない。

寺田●「同位体環境学」や「未来可能性」は、得意な研究者も苦手な研究者もいるはず。そういう問題を、別の専門領域の人が自分なりの言葉でかみくだくコーナー



これまでに発行したニュースレター

があってもおもしろいのではないかな。

阿部●インタビューする能力に長けている人も、自分で書くほうが得意な人もいる。訊ねるよりも答えるほうが好きな人も

いる。その延長線上でサイエンスライターを育てるなど、とにかく人を活かしたい。

熊澤●読者との距離を縮める努力ですね。聞き手、書き手の一人ひとりに、そういう意識で向かっていただく必要がありますね。

阿部●研究者というより、一般読者の立場の側に立つのですね。

田中●そのうえでなにを伝えるべきか、どう書くべきか、そういった細部にこだわらないと地球環境を俯瞰するような専門性は育まれないと思う。知らないうちに、それができている自分がいる。そういう媒体として機能すれば最高ですね。

阿部●どうすればもっと多くの人に読みたいと思ってもらえるのか、書きたいと思ってもらえるのか、走りながら考えましょう。

2014年1月31日 地球研「はなれ」にて

◆次ページからは、2度めの「刷新」に必要なことを深めるべく、4名の編集委員がコラムを張ります。まず、林さんがストックから刷新を生みだすことの重要性をデザインの世界から論じ、内山さんは、ストックされたデータを発信するためのプラットフォーム形成を、菊地さんは、人びとが環境問題の当事者であることを確認しあう場が必要であることを論じます。最後の鞍田さんの論考では、言葉のリアリティのありかを共感に求め、今後の広報媒体が紡ぐストーリーになにが求められているか、考えるためのヒントを提供しています。(熊澤輝一)

広報と成果発信のあり方を綴る(1)

ストーリーとストレージ
デザインの世界に学ぶ「刷新」の手法

林 憲吾 (地球研プロジェクト研究員)

フローからストックへ。最近よく耳にする言葉だ。フローとストックは経済学の用語だが、通常、経済的豊かさはGDPのようなフローの大ききで測られる。他方、リオ+20で提示されたInclusive Wealth Index (包括的な豊かさ指標)のように、各国が所有する自然資本、人的資本、人工資本などのストックで豊かさを評価する動きが、近年出てきている。もちろん、ストックがあればフローがなくてもいい、ということにはならない。ただ、ストックはフローを生み出す基盤なのに、これまでフローにばかり目がいきがちだった。その結果、限りある自然資本はどんどん損なわれてきた。それではマズい。21世紀の社会づくりには、ストックを見つめなおすことが鍵ではないか。そんな考えが、地球環境問題を背景としてぼつぼつ出てきている。

刷新と蓄積

デザインの世界でも状況は似ている。デザインは、それを見る人、聞く人、触れる人に、さまざまな感情や行為を促すはたらきがある。いってみれば、情報発信あるいはコミュニケーションを扱っている分野なのだ。フローからストックへ。この分野でもその潮流が生じている。

20世紀のデザインの主流は、「刷新」だった。たとえば、広告の世界。コラムニストの天野祐吉さんによれば、大量生産・大量消費の社会で多くの広告が担った役割は、少し前の新商品をすぐに古くさく感じさせること、いまもっている商品に不満を抱かせること、だった。企業は次から次へと新商品を世に打ち出し、たとえそれがいままでの商品とたいして内容に変化がなくても、人びとに手持ちの商品を捨てて、新商品を手にしてもらわなければならない。それが企業の成長だった。いわば過去を否定して刷新を感じさせるデザインが、豊かなフローを生み出すために求められた。

他方、グラフィックデザイナーの原研哉さんは、著書『デザインのデザイン』のなか

で、ストックから刷新を生み出すことの重要性にふれている。モノに飽和した現代の日本社会では、日常のなかに蓄積された膨大な文化のなかから、これまで気づかれていなかった価値を見つけ出し、それを驚きとして人びとに提供する。それこそがデザインの役割だ、という。私たちの暮らしをリフレッシュし、豊かにするためには、ものごとを刷新することはひじょうに大切だ。けれども、過去の否定にだけ頼るのではなく、過去の蓄積をうまく使いながら刷新をはかる。そんなアクロバティックな解もあるようだ。

紙とウェブ

情報発信や広報でなにかと話題になるのが、「紙からウェブへ」だ。しかし、これも「紙かウェブか」ではないだろう。この手話でしばしばいわれるのは、コンテンツの棲み分けである。媒体に応じたコンテンツの制作、あるいはコンテンツに応じた媒体の選択をせよ、と。ただし、必要以上にコンテンツが媒体に制約されなくてもよいのではないか。情報を受け取る人が、コンテンツをどう「おいしく」味わうかが、大切なことであるならば、媒体が豊富になったということは、そのぶんコンテンツをいろいろな手段で味わってもらうことができる。そんなふうに捉えるならば、ストックが生きてくる。一度使ったきりで蓄積されているコンテンツも、また違ったかたちで提供できるかもしれない。

じつのところ、このニューズレターの編集作業には、ずいぶんと労力がかかっている。なかでも時間がかかるのは校正だ。内容のチェックから細かい文字校正まで、複数の編集委員がいてねいにおこなっている。分量に制約があり、一度刷ると変更がききにくい紙媒体を選択しているからだ、ということもあるだろう。ともあれ、そんな多くの目と手が効かった文章たちが、気づけばすでに数年分ストックされている。これを広く使わない手はない。



ジャカルタ旧市街の広場。オランダ植民地時代の歴史遺産など、ストックを活用した再開発がジャカルタでも起きている

たとえば、フィールドからのレポートや所員紹介などの連載もの。これらの記事をウェブで連載ごとにまとめ直してみたらどうだろう。これまで30か所ものフィールドからレポートが寄せられ、所員紹介では31名もの地球環境観が語られてきた。それら記事のサムネイル写真とタイトルが、グッと並ぶ。その絵を想像しただけでも、なかなかよさげだ。地球研の多種多様な人材を知ってもらおううえでも、きっとよい。

ニューズレターが採用している冊子という形式には、流れがあつて、特集から、連載、お知らせまでを一冊のパッケージにして届ける役割がある。他方、ウェブは、情報をどんどん蓄積すると同時に、貯まった膨大なストックを再編集しやすい媒体でもある。これからのニューズレター。もちろん、冊子は冊子で、旬なイベントを取り上げるだけでなく、各号の流れ(=ストーリー)をもっと練る必要があるかもしれない。他方、ウェブでは、知らず知らずに貯め込んだコンテンツを魅力的な収蔵庫(=ストレージ)としてデザインする。そんなストーリーとストレージとの二人三脚で、一步一步よりよいものにしていくのはどうだろうか。

はやし・けんご

専門は建築学、東南アジア近代建築・都市史。研究プロジェクト「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト——そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」サブリーダー。2009年から地球研に在籍。

「データ」発信の功罪 影響力を活かしたプラットフォームづくりを見ずえる

内山 愉太 (地球研プロジェクト研究員)

研究成果の公開において、各種のデータの解釈を容易にするために、データの可視化、地図化が行なわれる。ここで考察対象とするデータは、人工衛星によって取得されたデータや、統計データを含む定量的なデータであるが、定性的なデータも視野に入れる。植生、民族の地理的分布や、各地のCO₂排出量、淡水消費量など、直観的に理解可能な可視化されたデータは、専門家以外への発信力も高い。他方、そのわかりやすさゆえに、発信された情報が独り歩きする問題も生む。客観的なデータは意思決定のための基盤的な情報であるが、地球研のような研究機関が、どのようなデータを、どのように発信すべきか、都市レベル以下のマイクロな地域と、全球レベルのマクロな地域の両事例を起点に考察したい。

デトロイト市にみる マイクロな地域の事例

地理空間情報を用い、地域を環境・経済・社会の3側面について統合的かつ小地域単位で分析することは、単一の価値観によらない、住民を含む多様な主体による地域マネジメントに寄与しうる。ただし、世帯所得、就業状態などの社会、経済系のデータは、一般に入手することが困難である。そのおもな理由は、それらのデータが、社会、経済的な格差を如実に表すデータであり、それらが広く公表されることを望まない各地域の関係者が存在するためである。

アメリカにおいては例外的に、社会、経済的な格差を示すデータが、小地域単位で公表されている。例として取り上げるミシガン州のデトロイト市は、近年では2013年の財政破綻などで注目された北米の主要都市である。市域内の黒人人口割合は80%、白人などが20%となっているが、市境界を境にその割合は逆転する(図)。同図は、人種による居住地の分化が進み、市内外の明確な経済的格差が存在することも間接的に示している。

デトロイト市においては、小地域単位の

統計データを積極的に活用し、地図化することで、現在市が抱える問題を空間的に住民と共有し、問題への対応と、今後の提案の発信が行なわれている。しかしながら、市内各地区の格差を示すデータの共有化が、かえって格差を固定化、または拡大する方向にはたらいってしまっていることが懸念されている。

マクロな地域の事例

全球的な視点においては高解像度だが、地域的な視点では分析単位としてやや大きい1kmメッシュ単位の環境・経済・社会の3側面に関するデータが、近年全球レベルで整備、公開が進んでいる。それにより、その3側面について統合的かつ全球的に、マイクロからマクロな空間スケールでの都市・地域間比較が可能になりつつある。それらのデータの多くは、市町村以上のややマクロな地域単位の統計データと、土地被覆や夜間光等の衛星データを基に開発された推計データである。それら多様な分野の推計データを統合的に発信する主体は、国際的な研究機関が担っている。

国連ハビタット(UN-HABITAT)において、1990年代に、都市レベルの各国の統計データの収集、公開をめざす活動が活発に行なわれたが、その後、収集されたデータの公開に関する活動は停滞傾向にある。その理由の一つは、各国において、都市自体やデータの定義が異なることに起因するデータ解釈上の問題が存在することである。くわえて、都市間でのデータ値の差異が曲解されることを懸念する意見が各国から寄せられ、それを收拾することが困難なことも主要な理由である。

研究機関の役割

全球的な視野を有し、地域の広義の環境問題の解決をめざす研究機関は、より複雑な利害関係をもつ国際連合などの国際機関には困難な、全球レベルかつ小地域単位の定量・定性的なデータの整備、分析、

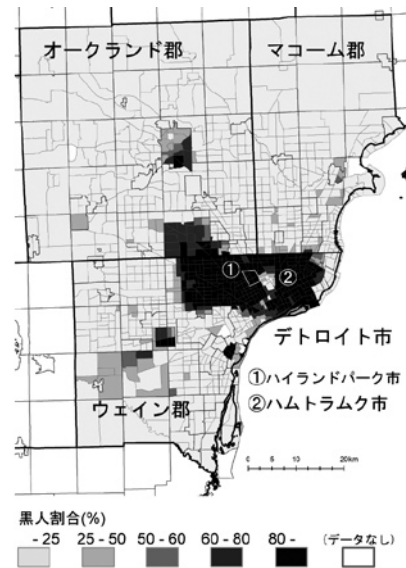


図 デトロイト市と周辺地域の黒人割合(2010年)。U.S. Census Bureauのデータをもとに作成

公開を担う必要があると思われる。

客観的なデータを発信することの功罪を認識しつつ、その影響力を活用し、特定の地域の現状をありのままに伝えることや、問題の所在を指摘し、それを解決する方法を示すことは研究活動の一つのあり方である。それらの研究活動において、マイクロとマクロの影響関係を説明可能で、分野統合的なデータを用いた分析を行なうことができる。そのような分析をつうじて、研究活動は、全球への影響を考慮した価値判断にかかわる意思決定を、各空間スケールでの地域マネジメントにおいて行なうさいの一つの軸となりうる。

各種の空間スケールと分野の横断的分析は、とくに困難な課題であり、異なる空間スケールの定量・定性的なデータを扱う異分野の研究者間の協働が欠かせない。スケール横断的な分析を促進するプラットフォームを形成することは、とくに地球研が担える役割の一つであると思われる。そのプラットフォームは、全球における地域の位置づけを共有化するためのものでもあり、研究者間のみならず、各地域の関係者に開かれ、戦略的地域マネジメントに向けた、建設的な議論や行動を誘発・育成するものが望まれる。

うちやま・ゆた

専門は都市計画、空間情報科学。研究プロジェクト「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト——そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」プロジェクト研究員。2013年から地球研に在籍。

当事者であることを確認しあう場づくり

菊地直樹 (地球研准教授)

総合地球環境学研究所で仕事を始めて約1年が過ぎた。多様な地域の多様な人と自然とのかかわりのあり方を総合的に学ぶことができるという点で、地球研は私にとって刺激的な場所だ。所属している「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理」研究プロジェクトは、持続可能な地域づくりに関する活動を対象とし、多様な人びとによる協働をつうじて、地域の環境にかかわる知識が生み出されるしくみを明らかにすることをめざしている。このプロジェクトでは、地域に根を下ろして活動している人びとの声を聞くことは欠かせない。持続可能な地域をつくるのは、そうした人びとだからである。

次つぎと各地を訪問し、地域に根を下ろした暮らし方を調べるのが、地球研に来たからの私の仕事の一つとなった。それは、まさに学びの旅であるが、戸惑いを覚える日々でもある。その戸惑いとはなにか。まず私の前歴を話しておかねばなるまい。

「生もの」を扱うレジデント型研究

地球研に来るまで、私は兵庫県豊岡市に暮らし、絶滅したコウノトリを野生に戻す取り組みに参加していた。人里に暮らすコウノトリが生息するためには、生き物が豊かな環境が不可欠である。そうした環境は人間が手を加えることによってつくられ、維持される。したがって、コウノトリを野生に戻すことは、人と自然とのかかわりをつくり直すことにほかならない。このコウ

ノトリの野生復帰という取り組みのなかで、私は研究者であるとともに、当事者でもあり、地域住民でもあった。こうした複数の立場を行き来し、地域の課題解決に向けた研究方法をレジデント型研究という。地域で暮らす視点から研究を行なう方法と言い換えてもよい。13年間にわたって野生復帰に取り組むレジデント型研究者としての活動。これが私の前歴である。

コウノトリはたんなる研究対象ではない。生き死にする「生もの」である。コウノトリが死ねば悲しみ、ヒナが生まれれば喜ぶ。人とコウノトリのかかわりもまた「生もの」として、日々変化している。「生もの」としての人と自然のかかわりは、そこでしか基本的に味わうことができない、移ろいゆくものである。そうした「生もの」は加工品となることで流通と保存が可能となり、多くの人々が手にできるようになる。

研究とは、ある視点から「生もの」としての現実を加工する行為である。しかし、その分野の専門家にしか通じない言葉を使うなど、加工しすぎると「生もの」らしさを損ねてしまう。レジデント型研究者として、「生もの」らしさを保つ加工とはなにかと問いかけてきた。「生もの」らしさを損なうと、そこに暮らす人たちに理解されがたい、研究のための研究になってしまうからである。

研究者と地域住民とが 同じ言葉で語りあえる場を

「研究者がなにを考えているのかわからない」。こうした声が豊岡市に住んでいたころの私の耳に、よく入っていた。使う言葉が違うため、地域住民と研究者の声はなかなか調和しないのだ。

考えてみれば、お互いコウノトリとともに暮らす当事者である。当事者であることから言葉を発していけば、お互いの話が通じるようになるのではないか。「鶴見カフェ」というサイエ

ンス・カフェを月1回運営し、コーディネーターを務めることにした。

ルールは同じ言葉で話そうと努力すること、だれでも発言できること、である。研究者はこの地に暮らす人たちの声を聞く。地域住民は研究者の思いを聞く。調査報告であったり、活動の報告であったり、アイデアの提示であったり、思いの吐露であったりと、テーマはさまざま。違う立場の人たちがお互いの違いを学びあうことで、コウノトリとともに暮らすという当事者性を確認する場をつくろうとしたのである。

私は、環境問題の研究において、それぞれの現場で味わっているに違いない「生もの」のらしさを損なうことなく加工していくことが、当事者として大事だと考えるようになった。濃淡はあってもそれぞれの人が環境問題の当事者であり、当事者に届かなければ、社会的に意味のある言葉にはならないからである。

「生もの」らしく加工することが 地球研の役割

私の戸惑いは、次々と訪問している地域で接している「生もの」を十分に味わうことなく加工品にしようとする、自身の当事者性の変化に由来しているように思えてならない。

地球研に集っている研究者たちは、多様な地域で多様な人と自然のかかわりのあり方を学びながら、それぞれの現場に固有の「生もの」を味わっているはずである。研究者たちはその「生もの」のらしさを損なわないように語り、住民たちは自身の経験や思いを語り、お互いが学びあう。こうした環境問題の当事者性を確認しあう場をつくるのが、多様な現場とかかわっている研究者が集う地球研ならではの取り組みではないか。1年を過ごし、そう思うようになった。

きくち・なおき
専門は環境社会学。研究プロジェクト「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理」共同リーダー。2013年から地球研に在籍。



コウノトリの巣立ち

言葉だ、言葉、言葉

鞍田 崇 (地球研特任准教授)

「人と自然:環境思想セミナー」
第32回「暮らしに寄り添う」
(2010年7月)のポスター



言葉のあり方について、折にふれ考えしてきた。きっかけの一つは、地球研の研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境」の一環として企画担当した「人と自然:環境思想セミナー」(2007-10年)*だった。

全35回、足かけ4年にわたったこのシリーズは、回を重ねるにつれ、日常的な衣食住にまつわるトピックをテーマとするようになり、研究者以外の方がたとの対話へと軸足を移していった。いや、「研究者以外の方がたとの」というより、「研究者的な言葉を用いない」というほうが正確かもしれない。それが、社会や暮らしのあるべき姿を問うなかで、同時代の、とくに同世代の人たちが求めている言葉とはどういうものかを考えながら、自然といきついたスタンスだった。

リアルな言葉を求めて

じつは、言葉が苦手だ。とくに、哲学の言葉。哲学をはじめとする人文学は「語ること」が務めだが、学術研究としてのそれは、多くの場合、ひとの語りの解釈をベースとする。しかも、その語りは、専門用語として入念に構築されたものに依拠している。そこに違和感を覚えてしまう。

この違和感は、人文学だからこそのものでもある。というのは、人文学の議論の対象は、本質的に、自分自身から切り離せない。学術的に客観性をもって語るのはいくまでもないが、議論の矛先は最終的には自分の生き方に迫るものとなる。人文学は主観的、ということではない。主観が客観かという以前のリアルな「私」の感覚が問われ



る、ということだ。その点で、とりわけ哲学の語りはリアルな語りであるはずなのだが、研究的なアプローチは、そこに至る手前で終了してしまいがち。もっともリアルであるはずの言葉がリアルじゃない。それが違和感のいちばんの理由だった。

日常的で平易な言葉と聴くこと

そんな違和感を解きほぐす手がかりを与えてくれた、二つの論考がある。和辻哲郎の「日本語と哲学の問題」(1929年)と、鷲田清一の「『聴く』ことの力——臨床哲学試論」(1999年)だ。

前者は、欧米の議論の翻訳ではなく、「きわめて日常的な、平易な」日本語の表現のなかに哲学の可能性を探ったもので、日本精神を追究した和辻ならではのスタンスが明示された論考として一般に知られる。ただし、ポイントは、日本語云々だけではなく、むしろ「平易な」言葉のなかに、哲学の本領が見出された点にある。そこからすると、理論的考察を主軸としたこの論考の内容そのものよりも、むしろ、折にふれ彼が手がけたエッセイに、「平易な」言葉を駆使した哲学的実践をみることもできるだろう。

後者は、哲学が語ることそのものを放棄し、聴くことに徹することの意義を問う。たしかに、哲学は語る事が務めだが、社会のなかでは、語るべき人はむしろほかにもたくさんいる。そうしたなかで哲学がすべきことは、語るべき人が、語るべき言葉を、語るべき時と場において、語りうるようにするために、ただしく聴くこと。

語ることだけが武器となる、言葉のスペシャリストであればこそ、語りの状況にも鋭敏であるべきだ、というのが、鷲田の基本スタンスだ。

鷲田のいう「聴くこと」は、ただ黙して受け身になればよいということではない。語りの状況を整える創造的な行為、言い換えると、語り手と

のあいだに共感を創出する営みにほかならない。いっぽう、和辻による「平易な」言葉への注目は、平易な言葉が平易なままにはたらく状況、すなわち生活感覚における共感を浮き彫りにする。和辻と鷲田、希代の語り手でもある2人の哲学者に通底しているのは、共感という言葉のステージにスポットをあて、しかも、自らの語りにおいて、そうした共感の創造的な展開を試みていることとあってよいだろう。

キーワードは合意ではなく共感

二つの論考は、現代社会で求められている言葉の方向性を考えるうえでも示唆的ではないだろうか。

共感と似て非なるものが、合意だ。合意の前提にあるのは、主張と説明と理解。なんらかの主張があり、説明によってそれに対する理解と無理解の差異が埋められ、ひとつの結論へと意見を集約することが求められる。だが、共感とは異なる。共感とは、差異を埋めることを必須とはしない。もちろん、そもそも言葉は社会的な存在であって、他者や異なる視点のあいだをブリッジする機能を有している。ただし、問題はどうかブリッジするか。共感とは、差異を差異のままに残しつつ、異なる者どうしが共有できる場を実現する。求められているのはそういう「場」であって、問われるべき言葉のリアリティもまた、そこにあるのではないだろうか。

「言葉だ、言葉、言葉」。なにを読んでいるか問われて、狂人ハムレットはそう答えた。合意の言葉と共感の言葉と、もとより言葉としての違いはない。リアルかどうかは、言葉そのものではなく、それをを用いる人の心の内にある。共感とはそういうことだ。

くらた・たかし
専門は哲学、環境思想。研究推進戦略センター特任准教授。2006年から地球研に在籍。

「人と自然:環境思想セミナー」では各回のフライヤーにもこだわった。デザインはすべて地球研スタッフでもある和出伸一さんが手がけた

*「所内共同研究会のあり方について(1)——『環境思想セミナー』をふりかえって」(地球研ニュースNo.29、6-7ページ)参照。

百聞一見——フィールドからの体験レポート

世界各国のさまざまな地域で調査活動に励む地球研メンバーたち。現地の風や土の匂いをかぎ、人びとの声に耳をかたむける彼らから届くレポートには、フィールドワークならではの新鮮な驚きと発見が満ちています



マングローブ林を利用する若者たちとのコラボレーション

竹村紫苑 プロジェクト研究員

たけむら・しおん

専門は景観生態学。研究プロジェクト「地域環境知形成による新たなコモンスの創生と持続可能な管理」プロジェクト研究員。2013年から地球研に在籍。

私の調査地である億首川^{おくくび}は、沖縄本島中部の田園風景が多く残る、金武町^{きんぶ}を流れる河川である。金武町では、田園風景やマングローブ林^{マングローブ}等の生態系を資源とした、観光による地域振興に取り組んでいる。そして、エコツアーのインストラクターとして億首川のマングローブ林を利用している同年代の若者たちに出会った。

億首川で研究を始めたきっかけ

私が本格的に億首川で研究を始めたのは2008年。億首川を研究対象地に選んだ理由は三つ。沖縄本島において規模の大きいマングローブ林が残存する数少ない河川であること。それにもかかわらず、干潟や森林のようす（とくに森林の次世代を担う若木が少ないこと）から、マングローブ林の現状に違和感を覚えたこと。そして、地元住民がエコツアーをつうじてマングローブ



若者によるモニタリング調査のようす

*マングローブ林は熱帯から亜熱帯地域の沿岸域や河口域に成立する森林である。マングローブ林を構成する植物をマングローブ種という。



億首川周辺に広がる田芋の水田



億首川のマングローブ林

林をじっさいに利用していたことである。

そのようなことから、マングローブ林の現状を把握し、持続的な利用に向けた管理のあり方を見出したいと思ったことが、億首川で研究を始めたきっかけである。将来的には、地域へと研究成果をフィードバックし、人びととのコラボレーションへと繋がりたいという思いをもっていましたが、そのような術も経験もない私は、調査区内に生育するマングローブ種の個体数と樹高を計測する森林調査に邁進した。

コラボレーションの始まり

2010年8月、億首川のほりにある体験型研修施設（ネイチャーみらい館）において「マングローブ・河口干潟の保全とその技術に関するフィールドシンポジウム」が開催された。そのシンポジウムにおいて、沖縄本島で研究するきっかけを与えていただいた共同研究者の先生から、億首川のマングローブ林の現状を報告する機会をいただいた。そこで私は、「億首川のマングローブ林は、沖縄本島のなかでもマングローブ林にとって生育に適した河川の一つであるにもかかわらず、高齢化の兆候が見られ、観光資源として持続的に利用するためには、人の手による管理が必要ではないか」と報告した。このシンポジウムでの報告が、マングローブ林をじっさいに利用している金武町の若者たちのネットワークとつながるきっかけとなる。

2011年6月、再びマングローブ林の調査に億首川を訪れた私は、若者たちといっしょにマングローブ林について勉強会を開

催したり、じっさいにマングローブ林の中を歩きながら、彼らが日ごろ感じていることについて話しあうなど、互いに情報交換するようになる。若者たちとのコラボレーションが始まった。

若者たちとのモニタリング調査

「マングローブ林内の干潟の状態を自分たちでモニタリングしたい」。この若者の一言をきっかけに、私は簡便な調査手法を彼らと考案し、現在も若者の手によってモニタリング調査が継続されている。その調査とは、億首川のマングローブ林内の調査地点に塩化ビニル管（塩ビ管）を打ち込み、干潟から露出している塩ビ管の長さを計測するというものである。この調査をつうじて、干潟に土砂が堆積傾向にあるのか、それとも侵食傾向にあるのかを露出する塩ビ管の長さによって把握可能になる。

2012年6月から観測を始めて約1年半、同じ億首川のマングローブ林のなかでも、干潟の状態には複数のパターンがあることが、この調査によって明らかとなった。すなわち、彼らの手によって得られたデータが、干潟の状態に適したマングローブ林の管理のあり方を考えるうえで、とても重要な資料になることがわかってきたのだ。今後も、億首川のマングローブ林をエコツアー等の観光資源にとどめず、地域の資源として持続的に利活用できるようなあり方を模索するため、若者たちといっしょに考え、そして、いっしょに調査・行動するような、「アクション・リサーチ」を進めていきたいと考えている。

文理の枠にとらわれない自由な探求心を育む

京都府立洛北高等学校「スーパーサイエンスハイスクール」への協力

報告者 ● 寺田 匡宏 (地球研研究高度化支援センター特任准教授)

2013年度から、地球研は京都府立洛北高等学校の「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」事業に協力している。洛北高校は、日本で最古の旧制中学校である京都府中学校(1870年開校)を源流にもち、湯川秀樹、朝永振一郎の2人のノーベル賞受賞者を輩出した伝統校である。SSH事業とは文部科学省の推進する研究指定校制度で、全国で約200校が指定されている。大学や高等研究機関との協力により将来の科学技術を担う人材のための授業を生徒に提供するプログラムである。洛北高校は2004年から指定を受け、現在第3期目の事業を実施中である。

講義から成果発表まで 多面的なプログラムを提供

洛北高校のSSH事業は中高一貫コースの生徒に対して実施されている。同コースの理系科目選択者に対してのSSHプログラムは、京都大学や京都府立大学等との協力のもとで実施されてきたが、文系科目選択者に対しては大学や研究機関との協力によるプログラムは限定的なものだった。そこで、文系科目選択者に対するプロ



2014年2月に地球研で行なわれたポスターセッションでの一コマ

生徒たちの研究テーマ

- 貧者の炎を賢者の炎へ
—— 焼畑から火入れを考える
- 現代社会における電力消費量
- 鴨川における水質調査
- 野良猫を通して「コモンズ」を考える
- 京都の寺社仏閣を守る —— おボウサンのボウサイ

グラムを提供できる機関として、地球研に2012年の夏に協力の要請があった。地球研では研究成果の社会還元の手段の一つとして環境教育に取り組んできたことから、2013年度から4年間の予定で協力することになった。

今年度は、文系科目選択者21人に対して別表のようなプログラムの提供を行なった。最終的な目標は、年度末の「研究発表会」において研究発表を行なうことであった。年度の前半はそれに向けての準備として、三つの講義を行なった。年度の後半は、生徒による研究過程として、研究テーマの設定、フィールドワーク、ポスター、論文、パワーポイントの作成を行なった。その過程では、教員をはじめ多くのスタッフが協力した。また所外においては、洛北高校の先生方や調査先の方がたが生徒による円滑なフィールドワークを支えた。

生徒たちのバラエティ豊かな 研究成果

年度の最後には、京都府全域からの9高校が参加したウィンターサイエンスフェスタin京都(於・京都工芸繊維大学)と地球研のポスターセッション、洛北高校サイエンスⅡ研究報告発表会で生徒たちが成果を発表した。



2013年12月に行なわれたポスターの作り方についての講習とワークショップで、高校生と話す佐々木タ子プロジェクト研究員(右)と筆者

生徒たちの研究テーマは左記の通りである。広い意味での環境研究を共通したテーマとして、生徒たち自身で考えたテーマであったが、視点や方法に個性が発揮されており、視点のユニークさから上記のウィンターフェスタで表彰されたグループもあった。生徒たちも楽しんで研究に取り組んでいたと思われる。

研究以外にも、生徒たちには、地球研フォーラムや、地球研オープンハウス、「地球研白熱教室」、「地球研しゃべり場」、地球研市民セミナーに参加してもらう機会も設けた。

上記を通じて、生徒たちに地球環境に関する知識を得てもらうとともに、文系や理系のワクを超えて考える方法を学んでもらうこと、自主的に研究テーマを決めて研究する能力を涵養することなどを目標としてきた。それらがどの程度達成されたかは、生徒たちが将来の活躍を通じて示してくれることだろうが、少なくとも実施した側からすると、やりがいと手ごたえのある1年間だったという印象がある。また、地球研のメンバーからは、「1年を通じて高校生とふれあう機会があることで、高校生の知的好奇心や初々しさなどにふれることができ新鮮な体験であった」、「高校生を通じて一般社会とつながる回路がみえてきた気がする」などの感想もあった。

今年度の成果をふまえて、来年度にはより充実したプログラムを提供できるようにしたい。

開催日	内容	担当者
2013年4月11日	特別講義「文化としての『地球』環境問題」	阿部健一教授
2013年6月26日	特別講義「アフリカの風土に学ぶ」 「農民の知恵に学ぶ —— ベトナム中部の社会的弱者層支援をめぐる」	田中樹准教授
2013年7月18日	特別講義とディスカッション「Education, Experience, and Ecoliteracy; Keep the Earth in Mind」(経験とエコリテラシー —— 地球をいつも意識しよう)	Steven McGreevy特任助教
2013年9月12日、19日、26日、10月3日	研究テーマ設定	寺田匡宏特任准教授
2013年10月17日、31日、11月7日、14日、21日、11月28日	フィールドワークとデータの収集	
2013年12月19日	ポスターの作り方についての講習とワークショップ	佐々木タ子プロジェクト研究員 石本雄大プロジェクト研究員
2014年1月9日、16日、23日、30日、2月6日	ポスター、論文、パワーポイントの作成	寺田匡宏特任准教授
2014年2月13日	ポスターセッションとディスカッション(「地球研しゃべり場」) in 地球研	
2014年2月20日	洛北高校サイエンスⅡ研究報告発表会	

「闇夜を歩く猫」と対話する

サンデル教授の連続レクチャーを受講して

報告者 ● **ナイルズ・ダニエル＝イライ**
(地球研研究高度化支援センター助教)

環境学という広い分野(個々の専門を問わず、地球研の研究者ならだれでもが最終的にかかわっている広い分野)は変わりつつある。環境そのものが変わるから、環境学も変わっていく。環境が変わっていくというのは、研究者だけの問題ではなく、一般市民のだれもが巻き込まれている動きであり、まただれもが認識している問題である。一世代前までは、少なくとも先進国においては、環境学は特別な知識をもって人のための科学であった。しかし今日では、一般市民も環境学に関心をもつようになり、そして環境問題は闇の中を歩く猫のように、大学のカリキュラムから脱出し、広く普及している。

しかし、闇の中を歩く猫はたんなる飼ひ慣らされたペットではない。神話にでてくるような魔力のある生き物であり、この世の中に現れただけで、これまでの知識と認識のありようを再考せざるをえない。人間の活動による環境の変化は明確で、劇的で、なおかつ素早い。極端に専門分化をってしまった科学はもはやその間に答えられない。人間が地球に与えている影響をどう理解すればよいのか。われわれの日常生活にはどのような影響があるのか。その責任はだれに、またなににあるのか。われわれにはなにができるのか。環境学はいまだにこのような問題に正面から向きあっていない。

レクチャーを実現させた地球研の研究アプローチ

何年もまえから、環境問題の解決は人間の文化に問いかけるべきものだ、と地球研



講義をするサンデル教授

が提言している。そういう意味で地球研は、環境学の研究所の中でも先頭に立っているといってもいいかもしれない。自然科学の実験的研究と、人文社会科学の分析とを連結させ、環境問題を総合的に考えることは本研究所の目的の一つである。このような文化的かつ解決志向型アプローチは世界中の多くの研究者の興味を引き、京都まで訪問してくださる研究者も少なくない。そのさい、彼らは地球研という機関のしきみを学び、研究成果を共有し、今後の共同研究の計画についていっしょに考えている。

そのなかで、ファン＝デール・サンデル・エルンスト教授は以前から地球研に興味を示していた。2009年、IHDP(地球環境変化の人間の側面に関する国際研究計画)の科学委員会のメンバーを務めていたさいに初めて出会ったが、2013年秋にサンデルさんは地球研の阿部健一教授の誘いに応じて、招へい外国人研究員として5か月間地球研に滞在することになった。「サンデルさん」と、われわれは親しみをこめて呼んでいた。

サンデルさんは数理モデルの分析についても、文化の歴史的な変化の過程についても、同じくらい気楽に語る事ができるきわめてめずらしい知識人である。アメリカにおける複雑適応系の創立者の一人であり、またアリゾナ州立大学の持続可能学部の学部長を辞職されたところである。さらに、2012年に、長年にわたる革新的な社会生態学の研究が評価され、国連環境計画(UNEP)に「地球の擁護者」として選ばれた。サンデルさんは地球研に滞在しているあいだに、環境学の過去・現在・未来をテーマに7回にわたってレクチャーを講じた。これは、地球研としては初の「連続セミナー」であった。

地球研レクチャーシリーズ 〈全7回〉
サステイナビリティ・サイエンスの未来に向けて
—Future Earthと環境学の最先端にたつ

2013年10～12月のほぼ隔週の金曜日(地球研講演室) 使用言語: 英語
講師: ファン＝デール・サンデル・エルンスト
(アリゾナ州立大学サステイナビリティ研究所前学部長)

第1回 導入と概略 10月18日
自己紹介とトピックの解説。持続可能性に向けた科学における最近の変化について。

第2回 どうしてこのような状態になったのか 10月25日
2億年間の人類の社会的・環境的な進化という長い歴史をふり返りながら、長期的に考えるとき、持続可能性がいかに重要であるかの解説。

第3回 科学の役割 11月8日
近代以降のヨーロッパにおける科学の役割について。いまわれわれはどのような問題に直面しているのか、またどうすればそれらの問題を解決することができるのか。

第4回 いま、どのような科学を 11月22日
複雑適応系の科学によって自然と科学技術をどう共存させるか、また過去から学ぶだけではなく、未来のためにどう学ぶのか。

第5回 なぜモデルが必要なのか 11月29日
未来のために、シナリオを構築すること、そしてその危険性を考えること、ダイナミックなモデルをつくることについて。

第6回 学際的な社会をどう育てていけばいいのか 12月13日
ヨーロッパとアメリカでの経験にもとづいて、学際的な総合科学をつくるうえで直面した問題と、試みた解決方法の紹介。

第7回 結論、そして展開 12月20日
レクチャーのまとめ。人類がこれまでに直面した最大の問題、自然と調和した開発方法について。

過去に学び、未来に問う

「サステイナビリティ・サイエンスの未来に向けて — Future Earth と環境学の最先端にたつ」と題して、サンデルさんはセミナーで現在の環境問題の背後にある、長期的な社会と環境との相互関係と、これまでの科学はそれらの問題をどのように理解し、分析したのかを説明した。それぞれのレクチャーでは、実用と理論にもとづいた人間認識の長期的な発展、分析の科学的方法の発展、社会生態学における複雑な概念フレームワークの現出、そして未来可能な計画をたてるためにモデリングの重要性を語った。要するに、科学技術が猛烈なスピードでどんなに進歩したとしても、現在の環境問題が定着した分析の科学的方法と社会の変化する能力に対し、どのようにあらためて問いかけているのかを明らかにした。

最後のレクチャーでサンデルさんは、Future Earth という新しい科学的なプログラムと、学際的研究という新しい概念にもとづいて、次世代の環境学が可能であるということを説明した。次世代には、環境問題の客観的な調査と、人間の幸福というような精神的で主観的なアプローチの相互関係を考慮に入れることになると期待できる。それは、神話にでてくる生き物と会話できるような環境学とでもいおうか。

(マレス・エマニュエル 翻訳)

ナイルズ・ダニエル＝イライ(NILES, Daniel Ely)

専門は地理学。研究推進戦略センター助教。2009年4月から地球研に在籍。

「アーカイブ」に導かれながら渡る、 仏教と環境と経済のスクランブル交差点

辻村優英 (神戸大学経済経営研究所附属企業資料総合センター助教)

私はいま、六甲おろしを全身に受けながら、神戸大学経済経営研究所附属企業資料総合センターの助教としてアーカイブ業務を中心に研鑽を積んでいます。当センターにはその名のとおり、国内外の企業経営に関する貴重かつ膨大な資料が収蔵されています。なかでもいま注目を集めているのが「鐘紡資料」とよばれるもので、1886年の鐘紡設立から1990年にかけての時代をカバーし、資料総数6,542点にも及ぶ大規模な資料です。薄い和紙に流れるような字が記された明治・大正期の資料からは、当時の人びとの息遣いが感じられます。会計の帳簿の数字が間違っていたとしても、いまならパソコンでちょっと直せばすべてを計算し直さなくてすむでしょう。しかし当時はそんなことは不可能なわけで、すべて手書きの数字を見ていると言いきれぬ緊張感が伝わってきます。すでに歴代の教員・職員の方がたの尽力により目録ができておき、私はそれにデジタル画像と本文テキストを追加したデータベースの設計と構築を任されています。

仏教と環境学をつなぐ 地球研のトランスな姿勢

このように書く私の専門は、経営学か情報学のように思われるかもしれませんが、じつは宗教学です。とくに「共苦」(compassion)に焦点を当てて、ダライ・ラマ14世の著作を中心に仏教思想の現代的展開を追っています。まったく畑違いの専門からいまにつながったのは、地球研で技術補佐員として携わった「地球研アーカイブス」業務のおかげです。地球研は専門のまったく違う研究者どうしでも気軽に話ができる場所で、transdisciplinary(超学際)を謳うにふさわしいところです。初代の日高敏隆所長は地球研を五日チャーハンにたとえたそうですが、いろんな具(専門)がまさにトランスしてできた料理(研究成果)を蓄積していつでも食べられる状態にしておくのが「地球研アーカイブス」の役割です。

学問とは第一に概念規定であるといわれるように、総合地球環境学へとトランスするために必要となる概念的な土台を、語源的なレベルから考究していく二代目の立本成文前所長の姿には強い感銘を受けました。仏教では、諸概念の規定・整理・理論化についての議論をアビダルマといいますが、これは仏教の四大学派(説一切有部・経量



鐘紡資料

部・唯識派・中観派)の土台となっています。立本前所長はまさしく総合地球環境学のアビダルマを構築しようとしているように私の目には映りました。前所長のこうしたtransdisciplinaryな姿勢は、くしくもダライ・ラマ14世の姿を彷彿とさせます。生物学者フランシスコ・ヴァレラの呼びかけで設立されたMind & Life Instituteにおいて、ダライ・ラマは四半世紀前から、さまざまな分野の科学者たちと対話を重ね、「心と生命」をメインテーマにtransdisciplinaryな土台を形作ろうとしていることで知られています。

仏教思想をふまえ、経済的概念の 位置づけを探求する

地球研の開放的かつ挑戦的な雰囲気は私の視野を拡げてくれました。現在、仏教と経済との関係について大きな関心を寄せています。この分野には大きく二つの潮流があります。一つは古典文献に現れる仏教徒たちの経済活動をあぶりだすもの、もう一つは現行経済のオルタナティブを模索するものです。前者については、社会学者マックス・ウェーバーの『ヒンドゥー教と仏教』が有名ですが、日本でも昭和初期に仏教学者友松圓諦が、『出家に禁ぜられた営利行爲』や『仏教経済思想研究』といった画期的な業績を打ち出しています。後者は、経済学者エルンスト・シューマッハが『スモール イズ ビューティフル——人間中心の経済学』のなかで「仏教経済学」(Buddhist Economics)を論じたのが嚆矢となり、現代の仏教者たちによって深められています。とくにシューマッハに始まる仏教経済学の背景の一つには、経済活動がもたらす広い意味での環境破壊に対する危機感がありました。

誤解を恐れずに言うならば、こうした先学たちは、地球研が掲げる理念と同じく、より包括的に人間の「生」の営みを捉えようとしたのかもしれませんが。目下、これら二大潮流をふまえながら、経済における重要概念である自己利益(self-interest)が仏教思想の現代的展開のなかでどのように位置づけられているかを探りたいと思っています。

草々

つじむら・まさひで

専門は宗教学。「共苦」(compassion)についてダライ・ラマ14世の思想を中心に研究している。論文に「The Politics of 'Compassion' of the Fourteenth Dalai Lama: Between 'Religion' and 'Secularism'」(2014)など。2013年3月まで技術補佐員として地球研に在籍。同年4月から現職。

所員紹介 — 私の考える地球環境問題と未来

部署の垣根を超え、研究者との協働に邁進する

本田孝之

(管理部財務課財務企画係員)

フィリピン共和国、カランバ市役所にて増水対策など市の取り組みについて聞き取り調査に同行した。写真は市役所前での記念写真。一番左が筆者



私は2009年12月に地球研にきました。最初の所属は、管理部研究協力課研究推進戦略センター支援室研究推進係(以下、センター支援室)で2011年3月までの1年4か月の間、係員として研究推進戦略センター(以下、CCPC)の支援業務をしました。前職では民間の機械工具商で営業をしており、地球研などの学術機関とかかわりやすく、研究機関での事務の知識はほとんどありませんでした。

そのなか、初仕事として研究プロジェクトやプログラムの枠を超えた研究所全体にかかわる調査、研究、支援などの中核的な活動を担うCCPCに直接かかわることができたのは幸いでした。センター支援室での仕事でとくに記憶に残っているのは、2010年2月に開催された1回目の「KYOTO地球環境の殿堂」と2010年10月のCOP10でのブース出展です。「KYOTO地球環境の殿堂」では、京都府、京都市、京都商工会議所、環境省、国際高等研究所、国立京都国際会館など多くの機関と連携しながら一つのイベントを企画、運営していく仕事にかかわりました。また、COP10でのブース出展では、パネル作成にともない各プロジェクトの研究内容について調べたり、他機関のブースを見学することで、地球研と他機関との比較ができました。

財務の立場から地球環境研究を支える

2011年4月からは、管理部財務課財務企画係(以下、財務企画係)の係員として、概算要求、年度計画予算、予算配分、財務分析、財務会計監査など予算管理に関する業務をしています。センター支援室では、地球研フォーラムや地球研市民セミナー、日文

研・地球研合同シンポジウムなどCCPCが中心となって実施しているイベントにかかわる仕事を中心にしており、基本的に配分された予算を執行する側の仕事をしていました。

現在の財務企画係では、予算を配分する側の仕事をしており、地球研の予算のメインとなる「地球環境研究の促進」など特別経費の概算要求から、当初配分や所長裁量経費配分などの追加配分といった所内の予算配分全般、予算執行の管理、決算業務と地球研の予算全体について要求・配分・管理・決算と年間を通してかかわっています。

また、予算が法律に則って適正に執行されているかを調べる各種監査の仕事もしています。とくに概算要求では、地球研が地球環境問題の解決に向けた総合地球環境学の構築をめざすなかで、現時点で社会に対してどう答えているか、またこれからどう答えていくか、具体的な成果、目標の提示を求められています。もちろん、事務方で概算要求書を作成するわけではなく、先生方に作成していただくうえで財務的な視点からのサポートをするのですが、各プロジェクトの研究内容を知っておく必要があります。要覧などの資料を中心に勉強していますが、まだまだ知識不足を感じています。

2013年5月から参加した「実験施設運営に関するタスクフォース」では、実験室に関する新たな規則づくりという、管理部と研究部の垣根を超えた仕事にかかわりました。研究者の方と同じ会議に参加し意見を交換する機会を得られ、少しですが、仕事の成果が新たな規則というかたちになり、とても嬉しかったです。

調査に同行し、現地で研究を感じとる

2013年12月9日～14日の約1週間、管理部海外研修としてフィリピンに「東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計」プロジェクトリーダーの嘉田(良平)先生の研究調査に同行しました。具体的には、フィリピン大学やカランバ市役所、アンゴノ市役所、サンタローザ市役所、フィリピン国家災害防災管理委員会などを訪問し、2013年11月の台風ヨランダによる被災状況とその対応、大雨による河川増水の被害状況などについて、今後の研究支援に向けての聞き取り調査に参加しました。

印象的だったのは、嘉田先生と共同研究をしているフィリピン大学の先生、スタッフとの信頼関係でした。今回の聞き取り調査(アンゴノ市役所、サンタローザ市役所では市長にも打ち合わせに参加いただきました)のセッティングはフィリピン大学のスタッフを通してされていたのですが、それは長年のやりとりによって培われた信頼関係があるからこそ可能なものだと思います。

現地でのプロジェクトリーダーのひじょうに熱意ある姿勢をじっさいに見られ、また、研究内容について具体的に知ることができました。今後、研修で得られたことを仕事にいかしたいと考えています。

*

今後は、所属部署の仕事はもちろん、実験施設運営に関するタスクフォースでの仕事のように管理部と研究部の垣根を超えたところでも必要とされるようになっていと思っています。

ほんだ・たかゆき

■略歴 2009年 地球研管理部研究協力課研究推進戦略センター支援室研究推進係員を経て、2011年4月より現職。

■趣味 格闘技(三十路記念にボクシングを始めました)。

■研究部からひとこと

嘉田良平(地球研教授)

本田さんにとって初めての海外研修にどう対応すべきか、私は相当悩みました。結局、私たちの研究の現場と活動内容を見ていただくのが一番だろうと思い、とにかく私に付いてきてほしい、挨拶だけは英語でねとお願いました。「My name is Honda, NOT Kawasaki」と言えば大丈夫だよと冗談でお教えしたところ、これが根っから明るいフィリピン人たちに大受けしました。本田さんの愛くるしい笑顔がさらに輝いた瞬間でもありました。

イベントの報告

地域連携セミナー鳥取
パネルディスカッションのようす



第5回 地球研東京セミナー

報告
都市は地球の友達か!?
— 地球環境とメガシティの
過去・現在・未来

2014年1月24日(金)12:30~15:50
(有楽町朝日ホール)

地球研東京セミナーは、地球研の研究成果と今後のさらなる進展について、国内の研究者コミュニティや一般の方に理解と協力を呼びかけていくため、年に一回東京で開催しているものです。今回は、地球研研究プロジェクト「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト—そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」(プロジェクトリーダー:村松伸地球研教授)の研究成果を発信しました。

安成哲三所長による開会挨拶の後、村松教授による趣旨説明があり、原研哉氏(日本デザインセンター代表取締役)が「覚醒が都市を変えていく」と題し基調講演を行ないました。続いて、板川暢氏(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程)による講演「トンボと共に生きる都市空間を考える」、岡部明子氏(建築家・千葉大学大学院工学研究科教授)による講演「ジャカルタのスラムに住んで『建築』する」を行ないました。

都市の持続性を視覚的にわかりやすく示したCSI模型



参加者でにぎわうギャラリー展示。ジャカルタの古地図や模型、生物多様性の指標としてのトンボの標本等を展示した

パネルディスカッションでは、「都市」のとらえ方、メガシティである東京とジャカルタの違い、物質的な豊かさではないものへの価値、東京が属する東アジアモンスーン気候という自然環境の可能性等、「都市」と自然環境の付き合い方に関する幅広いテーマについて議論が繰り広げられました。

当日は300名を超える参加者があり、「目からウロコの知見を得て大変有意義だった」、「環境を都市との関係で考える視点のユニークさと重要性に気づかされた」等多くのコメントが寄せられ、地球研研究プロジェクトの成果を発信する良い機会となりました。

また、セミナーの連携展示として、1月24日から26日の3日間、有楽町朝日ギャラリーにて「世界のメガシティ展」を同時開催しました。セミナー終了後には講演関係者によるギャラリートークを実施し、多くの参加者でにぎわいました。(本田智子)

第13回 地球研地域連携セミナー 鳥取
地球研・鳥取環境大学・鳥取大学
合同シンポジウム

報告
地球の未来、地域の知力
— 環境問題の解決に向けて

2014年2月11日(火・祝)13:00~16:00
(鳥取環境大学 大講義室)

地球研地域連携セミナーは、各地の大学・研究機関・行政等とともに、地球環境問題の根底を探り、解決のための方法を考えていくセミナーです。第13回目となる今回は、鳥取環境大学及び鳥取大学と協働で企画・開催しました。

鳥取環境大学の古澤巖学長及び平井伸治鳥取県知事より挨拶が述べられ、その後、秋山豊寛氏(ジャーナリスト・宇宙飛行士・京都造形芸術大学教授)が「宇宙から地球を考える」と題し基調講演を行ないました。続いて、田中樹氏(地球研准教授)による講演「遠いアフリカでの砂漠化対処に取り組むワケ」、小林朋道氏(鳥取環境大学環境学部教授)による講演「先端技術と知識を携えた『狩猟採集生活』の時代へ」、恒川篤史氏(鳥取大学乾燥地研究センター教授)による講演「世界の食料生産を支える土地:地域と地球をつなぐもの」を行ないました。

今回のセミナーでは、2013年6月29日に開催した第12回地球研フォーラムに続き、ツイッターを利用し、会場内の参加者から随時質問・コメントを受けつけました。

講演後のパネルディスカッションでは、ツイッターで寄せられた質問・コメントを活用しながら、コーディネーターの阿部健一氏(地球研教授)、横山伸也氏(鳥取環境大学環境学部教授)を中心に、講演者4名との議論が活発に行なわれ、地球研の安成哲三所長による閉会挨拶をもって締めくくりました。

当日は、高校生や大学生を中心に約400名の参加があり、「行動する大切さを知れて良かった」、「いまから自分ができること、子どもに伝えていくことを再考する機会となった」、「ツイートを公開することで多くの人の考えをみることができ、とても良かった」等の感想が寄せられ、参加者に環境問題について考えていただく良い機会となりました。(本田智子)

研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2014年1月20日～3月10日開催分

開催日	タイトル	主催(プロジェクトリーダー)	開催場所
1月20-21日	地域環境知プロジェクト2013年度第2回理論グループ・ワークショップ	佐藤 哲	地球研セミナー室
1月20-24日	「次世代シーケンサーを用いた生物多様性評価研究のためのマイクロサテライトマーカー単離」ワークショップ	石川智士	東京大学大気海洋研究所
1月23日	地域環境知プロジェクトセミナー「韓国・鎮安郡における村づくり支援の取組み」	佐藤 哲	地球研セミナー室
1月25-26日	シベリアプロジェクト G3会議	檜山哲哉 東北アジア研究センター共同研究 「氷融洪水とその社会対応から見る 極北圏社会の比較研究」	地球研セミナー室、講演室
1月28日	第7回 基幹研究ハブ勉強会「未来可能性 ― 人類の未来を切り拓く価値と行動」	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
2月1-2日	地域環境知プロジェクト 環境認証制度シンポジウム「国際認証を地域が使いこなすには」	佐藤 哲	地球研講演室
2月1-2日	研究集会「魚類の多様性研究における次世代シーケンシング技術の活用」	武島弘彦(東大気海洋研) 石川智士	東京大学大気海洋研究所
2月5日	水野IS「インドネシア リアウにおける泥炭地セミナー」	水野広祐	インドネシアリアウ州ブンカリス県
2月6日	第1回 Future Earth in Asiaセミナー	研究推進戦略センター	地球研講演室
2月6日	第6回 環太平洋ネクスサスプロジェクト研究会「気候ネットの活動～世界と京都」	谷口真人	地球研研究室
2月13日	洛北高校 SSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)講義ポスターセッションとディスカッション in地球研	研究高度化支援センター	地球研エントランス、講演室
2月14-15日	平成25年度地球環境学リポジトリ事業全体集会	地球研	国立京都国際会館
2月18日	第25回 中国環境問題研究拠点ワークショップ	窪田順平、北川秀樹	キャンパスプラザ京都
2月20日	基幹FS食と農「効率的なワークショップの進め方について:ワークショップのためのワークショップ」	スティーブ・マックグリービー	地球研講演室
2月22日	エリアケイパビリティープロジェクト三河湾市民セミナー「幅豆の海と人々」	石川智士	西尾市幅豆いまいぎセンター つじホール
2月22日	第6回 舟川ISセミナー「熱帯農業三大陸比較」	舟川晋也	地球研セミナー室
2月25日	薬品管理に関する講演会「化学物質の総合的な安全適正管理とは」	研究高度化支援センター	地球研セミナー室
2月26日	エリアケイパビリティープロジェクト第2回海洋タウンミーティング in石垣島	石川智士、東海大学海洋学部	石垣市市民会館
3月5日	国際会議サイドイベント Water-Energy-Food-Nexus in the Asia-Pacific Ring of Fire	谷口真人	アメリカ・ノースカロライナ 大学フライデー会議センター
3月7日	平成25年度第2回国際研究動向調査フォローアップ・セミナー「Bridging Research To Policy Divide: Air Pollution and Climate Change Health Impacts in Indonesia」	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
3月10日	平成25年度第3回国際研究動向調査報告	研究推進戦略センター	地球研セミナー室

募集 平成26年度 総合地球環境学研究所 インキュベーション研究(IS)公募要領

●インキュベーション研究とは

今回公募を行なうインキュベーション研究(以下「IS」という)は、地球環境問題の解決に向けた総合的な研究における新たな研究シーズを発掘することを目的として、地球研及び所外の研究者が共同して行なうものです。地球研の研究プロジェクト方式では、ISは半年から1年後に予備研究(個別連携フィージビリティ・スタディ:以下「個別連携FS」という)の候補となり、地球研の所内審査を経て個別連携FSに進むことが認められると6か月ないし1年の研究を実施し、地球研の所内審査及び国内外の評価委員で構成する研究プロジェクト評価委員会によって適切と認められれば、地球研運営会議の承認を経て研究プロジェクトに進展できる段階的な評価を経て行なわれます。なお、今回募集のISは、平成26年10月または平成27年4月から個別連携FSに進展し、さらに年度末の評価結果により、個別連携研究プロジェクトへの進展を目標とする共同研究です。

●申請資格

- ①国、公、私立大学等の教授、准教授、講師及び助教
- ②上記①と同等またはそれ以上の研究能力があると地球研所長が認めた者

●研究課題

地球研の要覧・ホームページの「地球研のめざすもの」等(II 7.「参考資料」)を参照して地球研の研究教育職員と充分打合せのうえ、設定してください。

●研究期間

平成26年5月～平成27年2月末
(平成26年10月に個別連携FSに進展した場合は、ISはその時点で終了とします)

●所要経費

旅費及び消耗品費等について、予算の範囲内において地球研が負担します。1件当たり30～100万円程度で予算計画を立ててください。ただし、備品(単価10万円以上)の購入は認められません。

●応募書類の提出等

- ①提出書類: 申請書等は、ウェブページよりダ

ウンロードしてください。

- ②提出期限:
平成26年4月3日(木)17時必着 厳守
- ③提出先:
総合地球環境学研究所 研究協力課研究協力係
〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457-4

●審査

研究課題の選考は地球研研究プロジェクト所内審査委員会において行ないます。予算計画を含め、申請内容に対して書類にて審査を行ない、書類審査を通過した課題については、地球研所員参加による公開ヒアリングを経て総合的な審査を行なった後、地球研連絡調整会議において採択課題を決定します。

詳しくは地球研ホームページをご覧ください
http://www.chikyu.ac.jp/archive/topics/2014/topics_2014IS.html

●問い合わせ先

管理部研究協力課研究協力係
Tel: 075-707-2148
E-mail: kenkyou@chikyu.ac.jp

イベントの報告

企画展 砂漠を生き抜く 人間・動物・植物の知恵

報告 2013年11月23日(土)~2014年2月9日(日)
(国立科学博物館)
主催: 国立科学博物館、地球研

地球研研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究——ポスト石油時代に向けて」では、研究成果発信を一環とした展示を国立科学博物館(東京・上野)で行ないました。砂漠では、動物や植物は体を変化させて環境に適応し、ヒトはそれを利用して暮らしています。そして砂漠に生きる人びとが生み出した文化には、私たちのこれからの生き方を考えるヒントがあります。プロジェクトの調査地であるアルジェリア、スーダン、エジプト、サウジアラビアの展示のほか、講演会や小学生を対象にした実験講座などを行ないました。日本とはなじみの薄い砂漠という過酷

な環境を生きる人間や動物、植物の姿は来場者の大きな関心を引き、総来場者数は11万7千人を超え、盛況のうちに終了しました。



編集後記

今春の異動にともない、編集委員としてはこれが最後の号となる。最初の仕事はNo.17(2008年12月発行)。「だれに向けてなにを発信」するのかが問われ、ちょうど誌面刷新が行なわれた直後だった。当時の委員は、編集長の阿部健一さんのほか、湯本真和さん、木下鉄矢さん、神松幸弘さん、遠藤崇浩さん、そしてぼくの6人。阿部・湯本・木下は教授、神松・遠藤は助教、ぼくはまだプロジェクト研究員だったが、ニュースレター編集会議は、立場やプロジェクトの枠を超えて、自由に意見交換できる機会として刺激的だった。ランチ・オンの談話会から喫煙室まで、思えば地球研にはそうした機会がそこかしこにある。でも、放置しておいてはいきてこない。手をかけ世話しなければいけない。この編集会議も同様。折しも、誌面「再」刷新の噂がチラホラ。新しいメンバーとともに、ますます自由で刺激的な場として、地球研ならではのニュースレターが生み出されることを願っています。(鞍田)

編集委員 ● 阿部健一(編集長) / 田中 樹 / 鞍田 崇 / 寺田匡宏 / 菊地直樹 / 熊澤輝一 / 林 憲吾 / 内山愉太
バックナンバーは <http://www.chikyu.ac.jp/archive/newsletter/index.html>



第2回 International Workshop on Future Earth in Asia

報告 2014年2月4日(火)~5日(水)
(京都ロイヤルホテルアンドSPA)

地球研ではFuture Earth in Asiaの研究推進体制の構築に向けた取り組みを進めています。今回のワークショップでは、研究者、NGO、開発組織、研究資金提供団体、そして直接Future Earthにかかわっている人びととともに、Future Earthプラットフォームにおいてアジアではどのようにすれば持続可能な社会にすることができるのか、またどのように社会と共創して地球環境に関する共同研究を実行することができるのか等について議論しました。

Future Earth in Asiaについては、下記URLをご覧ください。
http://www.chikyu.ac.jp/future_earth/

現在の編集委員メンバー(田中さんは海外出張につき欠席)。右下から時計回りに、寺田さん、阿部さん、鞍田、菊地さん、内山さん、林さん、熊澤さん、そして心強い編集室の菊地薫さんと岩永千晶さん



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
隔月刊
Humanity & Nature Newsletter No.47
ISSN 1880-8956

発行日 2014年3月20日
発行所 総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話 075-707-2100(代表)
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp
URL <http://www.chikyu.ac.jp>



編集 定期刊行物編集室
発行 研究高度化支援センター(CRP)

制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。